

Title	園田一亀著 韃靼漂流記の研究
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.9 (1939. 9) ,p.1267(119)- 1272(124)
JaLC DOI	10.14991/001.19390901-0119
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390901-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

園田一龜著「韃靼漂流記の研究」

野村兼太郎

史料の發見に二種ある。一つは人の知らない新史料を發見することで、他の一つは既に知られてゐる史料について新しい價値を發見することである。前者の場合には勿論大なる努力を必要とするが、運のよい場合にはあまり勞せずして珍しい史料を發見することがある。後者の場合には運よりも識見の優秀なことをより多く要求される。人の輕々に看過してゐた事實を發見するには、普通以上の知識とそれに培れた史的直觀力を必要とする。

園田一龜氏が研究の對象とした「韃靼漂流記」は所謂新しい史料ではない。徳川時代にも、又明治以後にも坊間に相當流布されてゐた書物である。殊に元の續帝國文庫の「漂流奇談集」に收められてゐるから、これを讀んだ者は決して少なしとしない。しかしその史的價値を認識した者は恐らく寥々たるものであらう。早くは故内藤湖南博士がこれを認め、未だその研究の大成を見ざるうちに物故されたのであつた。今園田氏がその研究と考證を終へ、これを公刊するに至つたのである。

「韃靼漂流記」といふのは、寛永二十一年四月一日越前國坂井郡三國浦新保村の船頭竹内藤右衛門、其子藤藏及び國田兵右衛門等五十八人の者が松前貿易の目的を以つて三國浦を出帆し、佐渡に至り、五月十日佐渡島を出帆し、

大風に逢ひ、韃靼國に漂着し、危難に遭遇し、僅かに園田兵右衛門以下十五名の者が辛じて生還した事件の報告書である。彼等の漂流した場所を園田氏は今の蘇聯領沿海州・ポシヤット灣頭の一角であるといふ。彼等はそこで修繕その他の準備を完了して歸國の途にいたが、その晩に不幸にも再び大風に遭遇して、最初の漂着地から西方約五十里の海岸に吹き流されたのであつた。(本書四八―九頁)。彼等はここで土人の陷穽に墮ち、竹内藤右衛門父子を始め四十三人は殺害され、園田兵右衛門等十五人は俘虜となつた。その後遭難地から今の奉天に送られ、さらに北京に轉送された。北京滯留一年の後、朝鮮を経由して、遭難後三年目、正保三年六月に日本に歸ることが出来た。故にこの韃靼漂流記は通常いはれてゐるやうに、竹内藤左衛門の手記ではなくして、園田兵右衛門、宇野與三郎の兩人が越前から江戸に召喚され、幕府の當路者の審問に答へた記録である。

しかし本書が單なる漂流物語以上に如何なる史的價値を有するのかが、從來所謂漂流談以上に高く評價されることになつた。然るに園田氏の研究に依れば、其記載する所は大體支那・朝鮮の文献と符合する。其の記述を觀るも、漂流・遭難・歸國の前後顛末は勿論のこと、所謂韃靼國の政治・軍事・宗教・風俗・言語・習慣・飲食・城邑・道路・人物等其他に互つて語れるものであり、實は普通の漂流奇譚とは聊か其の撰を異にしてゐる。殊に其の時期は偶然にも清朝が奉天から北京へ遷都せる時代・即ち入關直後のことであつた。彼等こそ北京に於ける大清帝國の店開を實際に目撃聞せる日本人であつた。従つて是書は日本人の手になれる清朝入關時の參考史料として唯一無二の文献である。(二六―七頁)。

勿論それは一商賈の見聞であり、記述も不正確であることを免れないが、園田氏のいへるが如く最も興味が多い時代に一ケ年以上北京に滯在し、身親しく明朝の滅亡と清朝の勃興とを見たのであるから、日清(滿)交通史にとつ

て重要文献たることを失はない。

園田氏の研究方法は文書及び書籍の史的検討として誠に正しいものである。先づその檢せられた諸傳本について内容を検討され系統を訪ねられたのは、この種の研究として當然なさねばならぬことであるに拘らず、その業の容易ならざるため、一般に忽せにされてゐたことである。氏はこの書の系統を二つとされ、甲種は六種、乙種は四種、さらに丙として引用書に依つてその名を知り得る未見本四種を掲げてゐられる。甲種の漂流年代は寛永十三、同二十、同二十一年とまちまちであるが、六種の中四種までが二十一年である。乙種は寛文十三年、丙種は寛文二十年としてゐる。「右の如く各傳本の内容は所記の漂流年代に依つて異り、漂流年代同じきものは、其の内容も又殆んど同一である。従つて十數種の異本も遡源追究すれば結局三種に落付くことになる。」(一四頁)。しかし氏は何れが最も根源的なものであるかについては斷定されてゐないが、同書の附録に石井研堂氏所藏の「異國物語」(續帝國文庫本)を採用されてゐるのを見ると、他の諸本と異なる點を多少附記されてゐるとはいへ、石井本を定本と見られたのであらう。

次いで園田氏は韃靼漂流記に關する從來の研究、徳川時代から明治大正、今日に至るまでの大小の關係文獻を一解説されてゐる。これもこの種の研究には當然なことではあるといへ、容易な仕事ではない。

かく漂流記そのものについて、周到な研究をなしたる後、氏はこの事實に關する調査に歩を進められ、内外の記録資料を検討されたばかりでなく、親しく奉天に居住せられた同氏は實地調査もされ、漂流民の生地である福井三國の地に赴き遺蹟を訪ね、史料を採集されてゐる。その勞や頗る大なりといはざるを得ない。かく十年近くに及ぶ研究の成果が本書であるから、頗る見るべきものが多い。殊に漂流民を奉天へ、奉天から北京へ、さらに北京から

京城、京城から釜山へ輸送した徑路の調査の如き、當時の交通輸送の状態を讀者に彷彿たらしむるものがある。加ふるに從來相當權威ある著作の誤謬を摘發せるものも少なくない。例へば「通航一覽」に「韃靼人附添ひ江戸へ下る」とあることの全然誤謬であるが如きである(一八八頁)。

かく本書は非常な努力に依つて史料を蒐集された研究であることは毫も疑ひないし、その研究法も頗る正しい。しかしなほ全然遺漏なしとはいひ得ない。例へば本書二一四頁に「徳川實紀」正保三年八月七日の條を引用して、宗對馬守から朝鮮へ送つた謝書について述べ、「之が原文は今日之を見ること出来ないが」と云々と記されてゐるが、この謝書の寫は慶應義塾圖書館所藏の寫本宗家文書中朝鮮往復書第十一卷に存してゐる。左に録して參考に供する。題して「不時之書、漂流民之返簡」といふ。

「日本國臣從四位下侍從對馬州太守 平 義成 奉復朝鮮國禮曹參議俞公 閣下

手簡來達披緘就 知

興民裕泰欣々余亦無它勿勞遐懷來所云

本邦漂流之民自韃靼國轉徙赴

貴國乃懇遇之謹送到馬嶋其口數考於別錄無以異焉余時侍

江府告諸執政則嘉其

兩國交隣之厚而宜行將以

聞我

貴大君也余頃者

賜暇發途在近監楮不詳歸州之日當進使价不宣

正保三年八月七日

日本國臣從四位下侍從對馬州太守平 義成

さらに朝鮮東萊、釜山の兩令公に對して、

「日本國對馬州太守拾遺平 義成 啓書

朝鮮國東萊釜山兩令公 閣下

金甌爽甚緬惟

體履佳謐瞻樹余亦無恙在

東武莫勞心緒前日

本邦越前州之民漂流自韃靼國赴

貴國護送被加款遇今至于

禮曹參議奉呈答書故差遣楯成稅縷々在使

价口陳更乞

諒察不宣

正保三丙戌年八月七日

對馬州太守拾遺平 義成

因みに本返書の本となつた朝鮮からの公文書は、園田氏の著作の一九七一八頁に掲げてゐるが、それは「本邦朝

鮮往復書」第九に據られた由であるが慶應書館本に依れば卷十にある。
 以上園田氏の研究を見れば、勿論未だその研究の手の及ばざるところはあるかも知れないが、この種の研究において最上の用意の下になされたものといつてよい。もし從來すでに知られてゐるその他の文献記録などについて、園田氏ほどの努力を以つて再検討したならば、新しき史的價値の發見さるるものも少なくないであらう。私は同氏の努力に對して深き敬意を拂ひつつこの紹介の筆を擱く。(菊判三二八頁、南滿洲鐵道株式會社鐵道總局庶務課發行)

前號(第三十三卷) 目次

- 理論と實踐 野村兼太郎
——最近イギリスにおける經濟學方法論論争——
- 商業革命時代の獨逸ハンザ 高村 象平
- 我國中小商工業金融に就いて 三村 稱平
- 古版經濟書解題 高橋誠一郎
一千六百六十九年版匿名氏著『自國貨物の改良、特に又羊毛の加工に由る英吉利の利益主張』
- カール・タルハイム 武村 忠雄
『國民經濟構造論の輪廓』
- 白井規矩稚著 『日本の金融機關—其の生成と發展』 高橋誠一郎

●一冊定價金五拾錢 郵税金壹錢五厘
 ●一ヶ年分金貳圓九拾錢 郵 稅 共
 ●一ヶ年分金五圓四拾錢

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
 ●營業に關する用件は發賣元宛
 ●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十四年八月廿五日印刷納本
 昭和十四年九月一日發行 每月一回一日發行

三田學會雜誌 第三十三卷 第三號
 編輯兼發行所 江田 範 保
 東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内
 印刷者 金子 鐵 五郎
 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
 印刷所 金子 活版所

發賣元 東京市芝區三田二丁目一番地
 丸善株式會社三田出張所

●尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す
 電話三田(45)二一九二六番
 振替口座東京二一八五二番

發行所 東京芝三田 慶應義塾内 理財學會
 振替 慶應義塾 塾 芝區三田二ノ二
 口座 慶應義塾 塾 東京一八二〇四番